

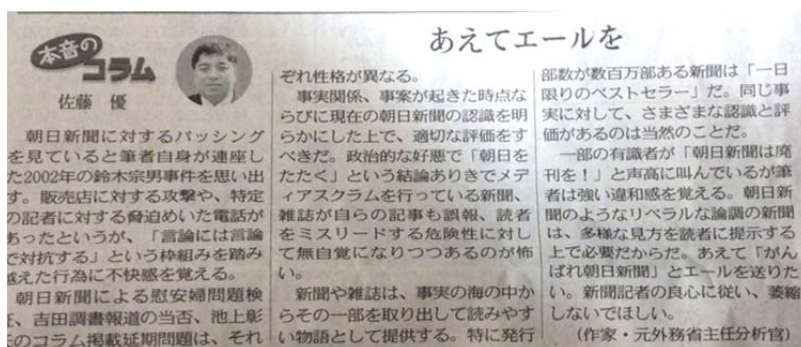
あえてエールを

表題は中日新聞 9 月 19 日の佐藤優（作家・元外務省主任分析官）の「本音のコラム」のタイトルである。

なぜ、このコラムを取り上げるのか。14 日に朝日新聞「声」に投稿して、「時の権力への批判を緩めるな」というタイトルで掲載された。朝日 4 本社版に掲載され、全国の読者に私の「声」が届いた。その後「特集版 声」などで読者からの厳しい批判が掲載されている。私の投書を読んだ友人から、朝日新聞に甘いのではないかという批判の「声」も寄せられた。

そんな折に目に留まったのが、「あえてエールを」というコラム

である。わたしの「思い」と共通するところが多く、途中からでも紹介しておきたい。



朝日新聞による慰安婦問題検証、吉田調書報道の当否、池上彰氏のコラム掲載延期問題は、それぞれ性格が異なる。

事実関係、事案が起きた時点ならびに現在の朝日新聞の認識を明らかにした上で、適切な評価をすべきだ。政治的な好悪で「朝日をたたく」という結論ありきでメディアスクラムを行っている新聞、雑誌が自らの記事も誤報、読者をミスリードする危険性に対して無自覚になりつつあるのが怖い。

新聞や雑誌は、事実の海の中からその一部を取り出して読みやすい物語として提供する。特に発行部数が数百万部ある新聞は「一日限りのベストセラーだ」。同じ事実に対して、さまざまな認識と評価があるのは当然のことだ。

一部の有識者が「朝日新聞は廃刊を！」と声高に叫んでいるが筆者は強い違和感を覚える。朝日新聞のようなりべラルな論調の新聞は、多様な見方を読者に提示する上で必要だからだ。あえて「がんばれ朝日新聞」とエールを送りたい。新聞記者の良心に従い、萎縮しないでほしい。

9 月 12 日のレポートにおいて、「新聞の二極化」傾向を指摘する本を紹介した。最近、「朝日・毎日・東京（中日）」と「読売・産経・日経」の論調が真っ二つに割れている。とりわけ原発再稼働と「歴史認識」問題で顕著である。今回の「朝日騒動」を考えると、安倍政権の動きと「二極化」の今後の展開も読めてくる。だからこそ、朝日新聞に徹底した検証と出直しを求めるとともに、「あえてエール」も送りたい。

(2014 年 9 月 23 日)